

如来蔵思想の形成

高崎直道

本日は、このような天気の良い時に、皆様多数おいでいただきました、うれしく思っております。ことに、このような大きな晴れがましい所で正式な講演をするのだということをつい迂闊にも気付かず、講演らしい用意を一つもしてまいりませんでしたので、大変申しわけないでございます。従いまして、ここに「如来蔵思想の形成」という題が掲げてございますけれども、この如来蔵思想というものが、仏教史の中でどのように形成されたかということをお話しますのではなくて、つまりもう一つ形成ということばを下に付けていただきます。この如来蔵思想の形成は括弧付で、『如来蔵思想の形成』という私の本の形成を少し語らせていただきました、そういうふうにあります。私は、自分のことを申し上げるといことは大変おこがましいことでございますけれども、何か若い皆様方の御参考になると存じて、そういう形で一応題を変えさせていただきますと思うのでございます。

私は、先程鏡島先生の御紹介にございましたように、本学

にはかなり昔からいろいろお世話になっている者でございます。実を申しますと、七年前にこの大学を退きまして関西の方に移り、大阪大学に勤めておりました。六年半でまた東京にもどることになりました、東京にもどってきましたとたんに、またこちらの大学の方から講義に來いというご命令で、再び今年からこちらの大学の教壇で講義をするようになったものでございます。昭和三十二年から四十四年までの十二年間、非常勤なり専任なりでこちらに伺っておったものでございます。先生方は勿論でございますが、聴講しておられる方も大学院の古い方は、私が前にいたころのことをご存じの方もおられるだろうと思います。また所属という点で申しますと曹洞宗に所属するというところで、もともとこの駒沢大学には縁が深いわけでございます。この研究につきましても、そのかなりの部分は、この駒沢大学で勤めさせていただいている間にした研究というものが土台となっているわけでございます。そして、その点につきましても、私は駒沢大学に対しまして大いに感謝の気持を表明したいと考えているものでござい

ます。

鎌田先生は本年度の学士院賞をおもらいになりました。華厳宗の教学につきまして大変長いことご研究を続けておられる。その成果が今年実られたということで、大変おめでたいことでもあります。この宗密につきまして、先程鎌田先生が、宗密の著作というものは大変膨大な量であって、これは宗密がそういう学問的な著述を著わすことを行^{ぎょう}としていたということであるというようなことをお話しなさったと思いますが、言ってみれば、大変な馬力で本を著わすということであります。私はこのことをそっくり鎌田先生に差し上げたいというふうに考えておるわけでございます。鎌田先生とは長いこと同僚としてお付き合いを願っているわけでございます。東大の方の大学院に來られましたところ、たまたま私の方が先輩でございます、まあそういう点で、どうも今日の講演も私の方が後でやらされることになったんですが、決して真打というようなものではないので、蛇足の方でございます。あまりむつかしいことを申し上げるのはやめたいというふうに考えておるわけでございます。実は私もはたからは大変馬力があるというふうに見られているようで、私のこの本を御覧になられた方はやはりその感を持たれたのではないかと思うのであります。分厚い本でありまして、これを読んでいただくのは大変申しわけないような気なんでしょう。しか

し今まで著わしました量で言いますと鎌田先生の方が更にそれに倍するくらいたくさんものをお書きになっておられます、まあそういう点では私は鎌田先生の後についていると、今後共できる限りそういう形で馬力をなるだけ持続したいというふうに思っている者でございます。余談になるのでございますけれども、昔三木清という哲学者がおりまして、この人がドイツに留学しておりました時のことです。まあこの人は談論風発、大変理論好きな人で、いろんな方と話をする。そうして勢いに乗ってお酒を飲んで、ずっと夕方を過ごし、夜半に下宿に帰ってそれから勉強をしていた。そういう言い伝えのある学者であります、鎌田先生もその気味がございまして、その点だけは私はどうしてもかなわないのでございます。

そういう点で、学問をやるということは、これはまあ鎌田先生がそうだというのではなく、私自身振り返ってのことなんでありますけれども、研究のテーマとか研究の方法とかいうようなことについてのひらめきというものはやはりある程度なければだめだろうと思えますけれども、いいことをいくら思い付いても、これを後続けて一つの仕事として最後にまとめるということがございませんとやはり具合が悪い。そのためには私共の仏教の研究というのは大変年がらみがあるのであります。私自身の仕事にかんがみましても、まったくその

通りのような気がいたします。

私が昭和二十五年に大学を出ました時、先程鎌田先生もちょっと名前をあげられました『楞伽経』というお経の研究をしたのでありますけれども、なにぶん学生の身分で、『楞伽経』の研究をして卒業論文を書いてはみたものの、実質的には何もわからなかったと言った方がよろしかったのであります。『楞伽経』は実は大変難しいお経でございます、私も曹洞宗、禅宗に属するというようなこともあり、菩提達摩がインドから中国にやって来た時に、「我に四卷楞伽あり」と言ってこれを恵可に付与したというような伝説がございますので、『楞伽経』は我々にとっては大変大事な經典である、そういう認識からこの『楞伽経』に取っ組んでやろうという気を起こしたわけなんです。ところが大変難しいというところがその後段々わかってまいりまして、いまだに私は『楞伽経』について完全にこれは理解できたというふうに思っておりますので、これから充分に研究しなければなるまいと思っております。

そこでそろそろ私の如来蔵思想形成の形成の歴史に入ろうと思うんですが、その『楞伽経』を読んだということいろいろ学生時代のことです。だから選ばずに先生のところにおじゃましていろいろ質問して過ごしたのですが、そういうふうにしてお話をうかがった先生のお一人

に川田熊太郎先生がいられたわけでありまして。川田熊太郎先生は教育大学の教授をしておられたか、或は東京大学の教養部の方に移られたころであります。今から二十五年以上前のことですが、川田先生のお宅に伺いましていろいろ伺った、と申しますのは、川田先生は『楞伽経』についてすでに論文を発表しておられましたので、そこで『楞伽経』のことについて伺ったわけでありまして。そうしましたら、これから大学院で勉強をするについて、どういうふうのことをやったらいいのか、私は『楞伽経』にもられております如来蔵思想について、その時から非常に関心はあったわけなんです。そういうことに関心があるんならば、ウッタラタントラ(Uttaratantra)というテキストがよろしい——ウッタラタントラと言われまして、その時私は初めて聞いたのでありますけれども、そのウッタラタントラと言いますのはサンスクリットであります。これは漢訳で言いますと『究竟一乘宝性論』、略しまして『宝性論』というテキストであります——これはチベット訳がありまして、それを、スチュエルバッキー(Th. Stcherbatsky)という大変優れたロシアの仏教学者の弟子にあたるオーバーミラー(E. Obermiller)が英訳したものが出版されているので、これを先ず読みなさいということをお教へ下されたわけでありまして。同じ頃、私は宗門の大先

輩であります宇井先生のところに、同じ曹洞宗のよしみということで伺ったわけであります。宇井先生は私が大学に入ります少し前に東大は定年でおやめになっておられましたので、直接講義を伺うという機会はなかったわけでございますけれども、なにしろ大変な大先生であり、この先生に一度でも警戒に接しておくのがよろしいというので、厚かましく出かけてまいりましてお話を伺った。その時にも私は如来蔵思想の研究をしたいんだというようなことを申し上げたら、宇井先生もそれならば『宝性論』を読みなさいと言われました。同じことを大谷大学の山口益先生に学会か何かの折に言われたことがございます。そのようなことで、当時の偉い大先生お三方から一様に『宝性論』を読めということを言われたんです。当時チベット語をまだ充分にする自信がございませんでした。さしあたって翻訳を使い、漢訳を読んだりしていたわけであります。

そういうさなか、何年かたちましたところで、もうないというふうに考えておりました『宝性論』のサンスクリットのテキストが出版されたという情報が入ってきたわけなんです。今ではちょっと考えられないことでありますけれども、あの終戦の前後というものはまったく外国における研究の状況というものはわからなくなっておりました、そういう本がいつ出たというようなことは、なかなか知るチャンスがなかった

わけであります。昭和二十六年に日本印度学仏教学会という印度学仏教学に関する全国的な学会ができ、そこで東西のいろんな先生方とお会いするようになりまして、段々そういう情報が入るようになってきたわけであります。京都大学の長尾雅人先生から『宝性論』のサンスクリットのテキストが出ているそうだけれども君は知っているかということをお聞かせたんです。残念ながらその時私はそういうことを全然知らなかったわけあります。よくよく調べましたら、これはちょっと細かな話になるんですけども、この『宝性論』の断片が中央アジアで発見されました、それが早くにある雑誌に載っていたんです。その雑誌の論文——これは後でわかったことですが、『宝性論』のサンスクリットのテキストの校訂者であったジョンストン (E. H. Johnston) が書いた論文であります。——一番最後のところに、このテキストはインドの仏教学者であるラーフラ・サーンクリティヤーヤナ (Rahula Sankityāyana) が、チベットのある僧院で写本をみつけて写真にとつて来た。そのネガがインドのパटनाに全部置いてあるんであります、それを引き伸ばした形でパटनाの美術館で保存していたわけなんです。この材料を使って自分は校訂の仕事を始めたいということ、その許可を得たとかいうことがちょっと書いてあったわけあります。この論文は前に見ていたくせにそこに気が付かなかった。その新しい情報と

いうのは、そのパトナからその本が出版されたということでもあります。これを昭和二十七年でしたか、京都大学の長尾先生がいち早くキャッチされました。出版されたのは一九五〇年です。昭和二十五年、ちょうど私が大学を卒業した年であつたわけです。そういうことで、これははいよいよ『宝性論』の研究というものは、本格的にしなければならなくなつたということがわかつてきたわけです。

チベット訳があつて、それをずっと研究するというような伝統は、実はそれ以前に京都の大谷大学にはありまして、山口益先生を中心にして、若い学者の方がずっとこれを戦争中に読んでおられたようであります。そのころのことにつきましては、今立正大学の教授をされております中村瑞隆先生が、そのころ大学院生であられたのか、その席で一緒に講読をしていたと、想い出をご自分の宝性論研究の序文のところを書いておられます。というような次第で、東京は知らなかつたんですけれども、関西の方は早くからそういうチベット訳を使って『宝性論』というものの重要性に気付いて勉強していたのではないか。東京はひと足遅れていた。これはいろいろな学風の違いというものもございまして、さらにさかのぼると、大学における仏教学印度学研究というものの成り立ち歴史というようなものがずっとひっかかってまいります。全国的な印度学仏教学会というものができてから、そういうような差

とか区別というようなものがなくなり、情報はお互いにどんどん速く入るようになりまして、現に外国との情報交換というものも進むようになりましたから、今日ではおおよそ考えられないことなんでありませうけれども、戦前から戦後の始めのころまでは、まだそういう状況が学界にあつたわけです。

そういうふうなことで、サンスクリット本がなければ、これはサンスクリット本がないんだからしかたがないというふうで、少し放置しておくこともできたんでありますけれども、サンスクリットのテキストが出たと聞いた以上は、チベットの訳があるかないかの問題ではなく、先ず一番もとななる原本が出たということでもありますから、これを読まないことには何もものが言えなくなつてしまつたわけなんです。そういうことで、しばらく私は『宝性論』について直接研究するのはこの時点であきらめたわけです。

たまたま運よくインドに行けるといふ機会ができました。その時も、インドに行つてまで仏教の研究をするつもりは実はなかつたんであります。もう少しサンスクリットそのものの勉強をしてきた方がいい、そういうつもりでインドまで出かけました。ところが、もう一つ目的として、インドに行つたらぜひ『宝性論』のサンスクリットのテキストをまず手に入れたい、それまで私が書いたり発表したりしたことという

のは正しいかどうかたしかめてみなくてはならないというよ
うな点がございました、それを非常に期待していたんです。

そういうことで、昭和二十九年にインドにまいりました時
に、まっ先にこの本を手に入れました。それをたずさえて留
学先でありますプーナにまいりました。インドには、それか
ら三十二年の始めまでおりました。最初は、とにかくサンス
クリットなりインド哲学の本、ウパニシャッド (Upaniṣad)
とかヴェーダーンタ (Vedānta) の哲学というものを研究し
てくるつもりでおったんでありますけれども、なにしろこれ
は本場でありまして、我々がちょっと本を読んだくらいでは
歯がたたないんであります。子供の時から知っていることで
あります。それで、インド人の学生仲間がサセスジョンを与
えてくれるには、インドではとにかく仏教の研究をすると言
えば大変立派な研究をしたことになるんだから、おまえも仕
事をまとめるならば仏教の研究の方をやったらどうだとい
うことであります。要するに、ヴェーダーンタとかそんなこと
の論文をインドで書いたって、見むきもされまいということ
であります。そう言われれば確かにそうでありますし、どう
せ仕事をするんなら一つままとめてみたほうがいいというよ
うな、よこしまな考えをおこしまして、そこで最後の一年間
『宝性論』の仕事に打ち込むことにしたわけであります。こ
のへんが今回の講演をさせられる羽目になりました研究の大

もとの始まりなんであります。

『宝性論』が大事であるというようなこと、実は今年大学
院で講義をさせていただきますにつきまして、やっぱりそう
いう如来蔵思想のことを何か講義をしてもらうのが望ましい
というようなお話でございましたので、その題でやっております。
従って、如来蔵思想がどういふものであるかというよ
うなことにつきましては、繰り返すのは省くつもりで最初か
らおりましたので、初めてお聞きになる方にはおわかりにく
い点があるかと思えますけれども、この『宝性論』という
テキストは漢訳されましたのが六世紀の始めであります。六
世紀の始めということは、それ以前に必ずインドにはその本
があったということ、これはまちがいが無い。いつごろにで
きたかということになりますと、それから何年前かというこ
とは大変決めにくいのであります。しかし、だいたい無著・
世親の作品、たとえば『瑜伽論』であるとか『大乘莊嚴經
論』『中辺分別論』あるいは更に『撰大乘論』から『唯識三
十頌』あたり、こういう唯識説に関する大変重要なテキスト
類がたくさんございますが、そういうものとだいたい同じこ
ろのものであろうと、そういうふうなことが内容からわかる
わけなんです。その程度のことは昔からわかっていたわけで
あります。そこでチベットの伝承に依りますと、これは彌勒
という人が本もとになる教えを韻文で書いた、それを無著が註釈

した、それが今伝わっている『宝性論』であるというふう
に伝わっているわけなんです。ところが中国の伝承では、先
程お話に出ました華嚴宗の第三祖法蔵でありますけれども、
この法蔵が伝えていることに依りますと堅慧という人の作品
であるということで、全然違った名前が出てくるのです。そ
んなことで一体『宝性論』はだれが作ったかというようなこ
とも大きな関心がございます。それから、いつごろのもので
あるかということも、これはサンスクリットのテキストを見
ることによって間違いなく確実なことが押えられる。そうい
う希望もあったわけなんです。そういったことで、だいたい
まあごく古く見積っても五世紀の始め、翻訳されるより百年
程度に、早くてその頃にできたであろうというようなことが
考えられるのであります。

この『宝性論』はどういう特色があるかと申しますと、我
々に今日伝わっているところで申しますと、インドに残って
いるテキスト、つまりサンスクリットで書かれたテキストで、
如来蔵思想というものについて書かれているまとまったテキ
ストとしては、これが只一つである。漢訳を見ますと『仏性
論』というものがございまして、これは天親菩薩とあります
から世親・ヴァスバンダウ (Vasubandhu) の作品というこ
とに漢訳で伝えております。これも如来蔵思想を説く大變大
事な論であります。そのほか、同じ堅慧のものとして『大乘

法界無差別論』というようなものもありますし、その他諸々
あるわけなんですけれども、どれも残念ながらインドのこれ
が原本でありますというふうなテキストがないのであります。
サンスクリットが伝わってないんです。それからチベット訳
もないですね。そうです、中国日本の伝承で言いまして、如
来蔵思想に關してまして最もポピュラーなテキストと言いま
すと『大乘起信論』であります。この『大乘起信論』も残
念ながら中国の漢訳二種類があるだけでして、チベット訳も
ないし、サンクリットの原本もみつかっていない。原本がな
いものについて何か言うということは大變冒險があるわけで、
逆にサンスクリットのテキストが出てます場合には、ものが
大變言い易くなる。確実性が増えてくるわけです。そ
ういう点で、インドでできた点で、由緒正しく、これはまち
がいないと言える如来蔵思想に關する論典といたしましては、
この『宝性論』一つつきりなんです。あとはそういう点で残
念ながらこれは絶対にインドのものであるという保証のでき
る論典がない——『仏性論』にいたしまして『大乘起信
論』にいたしまして、そういうことの資格がないのでござ
います。そういう大變貴重なテキストなんです。

この『宝性論』をずっとつっついていろいろに仕事をやっ
たわけでありまして、それは最終的には実はインドにおける
プーナ大学の Ph. D. (ドクター・オブ・フィロソフィ) の学位

論文として提出して日本に帰ってきたわけでありませう。これは『宝性論』の英訳で、ローマから一九六六年に出版いたしました。私にとりまして、これが第一作であったわけでありませう。

さてその『宝性論』を読んでおきますと、そこにいろいろの形でお経の引用が出てくるわけなんです。その引用と申しますのが大乘經典の如来蔵思想に関する触りになるようなところが非常に細かく丁寧に引用してある。一番たくさん使われておられますのが『勝鬘經』であります。その他『増不減經』であるとか、或は『如来蔵經』というようなものがございますが、『涅槃經』も一部引用されております。そういう引用してある經典をずっと漢訳なりチベット訳にあたってゆきますと、ある程度『宝性論』が成立するまでの如来蔵思想がどのようにして発達してきたかということがわかってきたわけなんです。そこで、これは大変いい材料を得た。如来蔵思想というのは『宝性論』において一つのまとまりをみせているが、それ以前にどういう時代からどういうふうに説かれてこれが発展してきたか、これをひとつ研究してみようと、そういう気持を持ったわけでありませう。ごく簡単に『宝性論』を読んでいるだけでわかる限りのことは、『宝性論』の英訳、その序論のところを書いていただけますから、今回の『如来蔵思想の形成』という本のあら筋と言いま

すものは、だいたいこの『宝性論』から得たわけでありませう。この材料を使って、さらにそれに漢訳の經とチベット訳というものを突き合わせて、それで如来蔵思想というものがどういうふうにしてできたか、その筋道を考えてみようというところが私にとりまして次の仕事になったわけなんです。そのことを次の仕事にしようと思いましたが昭和三十二年のことでございます。ちょうどインドから帰りまして、駒沢大学ではじめて講義をさせていただきましたことなんです。それから学会の研究発表、駒沢大学の紀要、そういうようなところでも折にふれてそういう問題意識をもちまして論文を発表してまいりましたので、これは『紀要』などをごらんになっていただければ、いくつかはその中で発見していただけたらと思います。印仏学会での発表もやっぱりそうです。

そういうふうなことが今まで『宝性論』のサンسكريットが出てくるまでは、だいたいの筋道はわかっても押えどころがなかった。その一例といたしまして一つだけ申し上げたいのは、如来蔵という思想は実は別の我々が普通に使っていることばで申しますと、仏性ということでありませう。つまり仏の本性、あるいは仏となる可能性、仏となる因子というようなことがインドにおける仏性ということばの使われまして最初の意味なんでありませうけれども、この仏性ということば

を使っている大變有名なことばがございますね。これは『涅槃經』の「一切衆生悉有仏性」ということばであります。中国や日本の仏教というのは、この「一切衆生悉有仏性」という『涅槃經』のことばを軸といたしまして、これを土台としまして、そこからずっと展開してきていると云ってよろしいわけなんです。これは中国においてこの思想を受け入れた時の事情によると考えてよろしいと思えます。もう一つは仏性ということばが大變中国人にわかりやすかったと思えます。仏というものが、その仏の本性、あるいは仏となる性質というような意味で、大變簡單明瞭に受け取られるのであります。そういうことで、中国仏教、日本仏教の歴史を見ますと、仏性ということばが圧倒的にたくさんつかわれています。如来蔵ということばも『楞伽經』とか『起信論』にはありますし、『勝鬘經』にもございますから、これは皆知っているはずなんですけれども、大變解釈が難しいんです。そういうことと、それからそういう点で仏性ということばが大變なじみが深いということ、どうも最初に高らかに宣言したのが『涅槃經』であるというようなことから、この如来蔵仏性の思想というのは、一番古いところでは大乘の『涅槃經』が説いたのであろう、こういうふうな推定がだいたい行なわれていたものであります。これは宇井伯寿先生の『印度哲学史』あたりまでの研究史ではそういうことでありまして、この『印度哲学

史』の説というのが、だいたい戦前における定説を示していたと云ってよろしいと思えます。ただチベット訳と比較してみますと、どうも事情が複雑になってくる。その『涅槃經』の中には、『如来蔵經』の中にすべての衆生が如来を宿しているものである、そういう意味で如来蔵であるというふうに説いている、しかしそういうふうな説き方をしているのは外道のアートマンとまちがえるものではないかというようなことが質問の形で出てきている。それに対して、いやそうではないということばとして『涅槃經』は如来蔵、仏性というものの本質を説明するわけなんです。漢訳の曇無讖の訳を見ますと、そこに『如来蔵經』というような名前が出てまいりませんから気が付かなかったんですけれども、チベット訳で見ますと、どう考えても『如来蔵經』というお経をさしているんです。事実その『如来蔵經』には、「一切衆生有如來蔵」或は「一切衆生如来蔵」という訳語が出てくるわけなんです。そういう順序で言いました、どうもこれは『如来蔵經』が先にあって、その「如来蔵」ということばを後で『涅槃經』において「仏性」と言いなおしている。すべての衆生が胸の内にもっております如来となる可能性、如来となる本性、如来と同じ本性であって、それが衆生をしてやがて如来たらしめるわけにありますから、仏となる原因、仏となる因である。そういう説明もつくんでありますが、この仏性とい

うのは、そういう如来蔵というわけのわからないことばを、もう少しわかりやすく『涅槃経』が説明しなおしたことばだというふうに受け取れるわけなんです。だいたいそういうふうなことで、『如来蔵経』がもとであろうということが、チベット訳を通すとわかったわけでありませうけれども、さらに、『宝性論』における引用のされ方からみても、『宝性論』が『如来蔵経』というものを大変重視している。それから『不増不減経』であるとか『勝鬘経』であるとか、こういうものを大変重視している。そういうことからみてですね、どうも『如来蔵経』というものが一番古いものであって、『涅槃経』はその後からできたものらしい、こういうふうな感触がでてきた。大体これをサンスクリットの資料をたどっていくことによつてあとづけることができたわけなんです。ここで私にとりましては、『如来蔵経』から『不増不減経』や『勝鬘経』というものを経まして『宝性論』に至る大きな幹、幹線道路が敷かれたという感じを待ったわけなんです。それに対して『涅槃経』というのには、『宝性論』における引用のされかたから見た限りでありますけれども、バイパスであつて後からつけられた別のルートである。『宝性論』は『涅槃経』を利用してありますし仏性ということばも出てきます。『宝性論』がありますので仏性ということばのものとサンスクリットが何であるかということばはつきりしたわけがあります。そう

いうふうなことで、どうもメインな伝統と言いますと、『如来蔵経』から『不増不減経』や『勝鬘経』を経て『宝性論』に至るものであるという、そういう感触を得たんです。そこでそういう線で一つ整理をしていったらどうか。実は『不増不減経』とか『勝鬘経』をみますと、仏性ということばが使われていないんです。『涅槃経』は仏性と如来蔵と両方を使っているわけなんです。そこで正統派の思想としては、如来蔵ということばの方をインドでは重く見ていたらしい。もう一つ、『勝鬘経』の名前をあげておりますので、『勝鬘経』の後からできたことが歴然としておりますお経が『楞伽経』なんです。この『楞伽経』も如来蔵ということばを使っているのに仏性ということばはないんです。漢訳にはあるんですけども、その原語をサンスクリットであてはめてみますと、『涅槃経』で言っている仏性とは違うんですね。そういうことで、『楞伽経』もやはりサンスクリットがありますから、インドでできたことばはつきりしておりますし、後世のインドで大変重要視されております。そういう点でみますと、インドの正統派と言いますか、そういう方では、如来蔵ということばの方に歴史的な重みをもたせて、これを大変尊重している。『楞伽経』の中には「如来蔵説」というようなことばも出てきます。タターガタガルバ・ヴァーダ(tathagatagarbha-vada)と申します。しかし、仏性説ということばはないん

ですね。そういうところからみまして、インドの歴史を見ますと、どうも如来蔵ということばの方が重みがある。これはチベットに翻訳された如来蔵思想に関する典籍をみましてもやはりそうなんです。ところが中国日本では、『涅槃経』というものが——これは現在あります『如来蔵経』よりは先に訳されているようであります。——少なくとも中国の仏教界において、非常に有名になりもてはやされ問題にされましたのは、『涅槃経』の仏性論であります。そこでそういった伝統もありまして、中国日本では、仏性ということばに基づいて如来蔵思想というものをずっと伝えてきている方がどうも主流になっている。そういう教理と言いますか思想と言いますか、そういうものの伝統の違いというようなものがあることを感じたわけなんです。そこで私は、インドにおける如来蔵思想の形成という点で言いますと、どうしてもこれは如来蔵思想と名づけなければならぬ。大変なじみの薄いことばであるかも知れないし、説明を要することばであります。この間も大学院で如来蔵ということばについて一時間も話したわけなんです。そういうことで大変説明を要することばであります。しかし、わかりにくいんですけれども、どうしてもこのことばをもって思想を代表させてみたいと、そういうふうに考えるわけでございます。そして、そういう大きなまづ一本の幹を作っておいて、幹にあと枝葉をはめこんでいく、

そういう手続きをずっととってきたわけなのであります。これが私が書きました如来蔵思想の本論の第一部の作業でありまして、最初のところで私は、浄土三部経になぞらえまして、この『如来蔵経』と『不増不減経』と『勝鬘経』という三つの經典に対しまして、如来蔵説の、如来蔵思想の、或は如来蔵系經典の三部経というような名前を仮りに付けたわけなのであります。こういう研究といえますのは、あくまでも仮説に立ってやっていることでありまして、誰も本当に如来蔵思想の形成の歴史も、お経のできた歴史も見て来た人はいないのでありますから、別のもっと有力な材料が出て来れば、こういう歴史順序というものは或はまた変わるかもしれません。それまでのわずかな間の命なのでありますけれども、一応そういうことで新しく思想の歴史を組み立ててゆく、そういったところが私のいたしました仕事の学会に対する一つの貢献になったというふうに、先生方が考えてくださったようであります。学問研究というのはやっぱり人のやったことの後についてやっておりますとなかなかできません。新しいことを見付けるといふことも大変大事なことですけども、いろいろな点が幸いたしまして、二十年ぐらいかかりまして、一つのテーマをやつとまとめるまでに漕ぎ着けたわけでありま

す。ところで、その『如来蔵経』は一体どこからどういふ思想

を受けてできたか、これがわかりませんが、如来蔵思想の歴史というのは仏教の中で落ちつかないわけがあります。それは『如来蔵経』がわからないと——。その如来蔵思想の先祖さまはその先祖さまのまだ先があるわけなんです。これも、どうしても考えなければならぬので、これにつきまして、そこで第二編の方で「如来蔵思想の前史」プレ・ヒストリーというように名前を付けて、『如来蔵経』乃至『宝性論』に大きな影響を与えた大乘の經典類というものをずっと拾っていて、どういう思想がどういう影響を与えたかということを見ていったわけなんです。その中では、大もととして、大乘の空観というものの基を築きました『般若経』というのが当然ありますし、それから、一乗思想というものが如来蔵思想と大変深く結び付いている。と申しますのは、仏となる原因、仏性というものをすべて、衆生が例外なく持っているということが如来蔵思想の大変大事なことであり、すべての衆生が例外なくというような教えは、さかのぼりますと『法華経』の一乗思想というものにいくわけであり、声聞であるとか縁覚であるとかそういう区別なしに、すべてそういうのは方便の説であって、どの道を通ってもすべての道が仏になる道であるというのが『法華経』の立場でありますから、これが如来蔵思想の大もとにあるということは間違

いないのであります。そういうふうなことで、『般若経』とか『法華経』というものが、遠い先祖として大事な役割をしているわけなんです。しかしより近いところでは、これは何と言いましても『華嚴経』のようであります。『華嚴経』の如来性起品というのがございまして、ここに『如来蔵経』と大変よく似た説き方をしている。これが『如来蔵経』の一番大もとになっている。私はそういうふうな考えましたので、直接に如来蔵思想というものが出て来たもとは『華嚴経』にある、ことにその性起品にあらうと、そういう推定を立てているわけがあります。そういうことで、如来蔵思想の生み出されるもとのところを主な線として、そういう『般若経』や『法華経』や『華嚴経』の性起品というふうなところに見出ししているわけなんです。そのほかにもいくつかの大乘經典がいろいろな役割をはたしているということが『宝性論』に引用されている經典の多さからわかるわけなんです。大乘經典を全部というわけにはいかないんですが、目星を付けて大蔵経を引っ繰り返して、その結果が第二編の内容になったということであり、これも、一切経全部見通して、おられません、見落としがまだいくらかもあるうと思えますし、今後そういう筋道に関しまして、いろいろな見解が発表されるということが望まれるわけなんです。たとえば私の場合ですと、教理の発展ということだけでこれを見てみたわけ

なんです。なぜそういうことを説くようになったかという社会的な背景とか、インドの歴史的文化的な背景というようなこともやはりだいじな課題であると思うんです。こういった点につきまして、もっと広い範囲、インドの碑文であるとか、或はインドのそのほかの当時の材料、グプタ時代に至るまでのインドのいろんな社会条件を示す資料、そういうものを使って調べていきますと、また仏教でこういう如来蔵思想というようなものを盛んに説くようになった理由というようなものもわかってくるのかもしれない。そういう点につきましてはこれからの課題にして、やはりたくさん問題がでてくるわけでありませう。

またこの『如来蔵思想の形成』ということは、どういう形ではじめてできたか、形づくられたかということに重点を置いたわけでございます、この形作られた如来蔵思想というものが、インドにおいてその後どのような形で伝承されていたか、またこれが中国・日本にどういうふうに伝わって来て、それがどういふ影響を及ぼしたか、或はさらにチベットに伝わってこれがどうなったか、或はインド本土の中でこの如来蔵思想というものがどんな形で発展したのか、こういった点がまだまだいくらかでも問題として残されている。鎌田先生のお話ではないんですけども、私なりのこういう研究と申しますのは、ある一定のところを限度を設けまして、そこで

やりませんとどうしてもまともまらない。まともったところでそれですべて終わったのではなくて、そこから新しい問題がたくさん出てまいります、そういう点でこれからやる問題と、いうのはいくらかでもあるわけなんです。差し当りましてもう一つ大変重要な、華嚴宗の法蔵によりますと頼耶縁起という名前と呼ばれておりますアーヤ識の思想、つまり唯識法相の思想と、如来蔵縁起と名付けられましたこの如来蔵思想というもの、その間の関係というようなものがまだまだわからないことだらけなんでありまして、これをどう解決するかというところが私にとりましては差し当りしての今後の問題になっていくわけでありませう。

それから問題をあげていくならば、如来蔵思想というのは仏の立場から見ているんですね。仏となる原因があるなんていうようなことは、私共はわからない、「かわいそうに衆生たちは知らないんだ」ということがどのお経にも書いてある。仏さんだけがわかる。私共はいかにもあることがわかっていようなことを言って、こうしゃべっているんでありますけれども、お経に書いてあるからそうだと思っただけであります、心底からそれがわかっていっているわけでないんです。これはまあ実践の問題になりますけれども、こういう仏の立場からものを見ていくということを、伝統を更に進めてまいりますと、これは密教になっていくわけなんです。そういう

ふうな、如来蔵思想から密教へというような展開、これはインド仏教の思想展開としては、ある一つの大事な線であろうと思われるんですが、これにつきましても、まだまだ十分な研究はだれもしていない。みんなその関連のあることは気付いておられますけれども誰もしていない。今後の大きな課題となっていくと思います。

それからチベットにおける伝承、これはすでに研究している人はたくさんおられます。中国・日本の如来蔵思想は、先年亡くなられました小川弘貫先生がずっと続けておられましたし、この後を継いで若い方々で、この駒沢大学でもやっておられる方がおられると思いますが、まだ問題はいくらでも残っている、そういう状況でございます。

そういうことで、問題を限定いたしまして如来蔵思想の形成という形にして一つにまとめた。そういうことなのであります。今後ともいつまでたちましても同じテーマから卒業するということができませんで大変なでありますけれども、仏教の研究というのは、どこか一つの点をつかまえて、これにしがみついてずっといくと、なんかあるいはわかってくるのではなからうかというような気がいたしておりますので、命が続く限り、もう少しこの問題に首を突っ込まざるをえないというふうに私は考えている者でございます。

三十分ぐらいでやめるつもりでいたんでございますけれど

も、また話が長くなっちゃいました。これで終らせていただきます。御清聴どうもありがとうございました。

(本稿は去る五月二十一日、仏教学会の講演筆録に、筆者が加筆
整稿したものです。編集係)